

小豆島土庄町旧戸形小学校の再生プロジェクト

まづは校庭の緑化である。しかし敷地は海岸のすぐ横に位置し潮風が当たり塩害、乾燥に強い植物でないとなつ育たない。そこで学校の近くの植生はどのような状況か海岸線を歩いてみた。小豆島の海岸線の総延長は126km、属島を含めると170kmに達する。日本列島も海に囲まれた島国、その海岸線は長大なものである。昔は白砂青松といわれ美しい景観が全国津々浦々に見られたが、高度成長以後の日本の海岸線は、大量の漂着物(ゴミ)が吹き溜まり、それも

である。

現在、全国の小、中学校で校庭を芝生で緑化する運動が盛んで東京でも日に日に校庭が緑化され始めている。しかし、海岸ビオトープによる緑化は私の知る限り全国にその事例はない。このプロジェクトを成功させて、海岸植生再生モデル・ガーデンとして日本全国に情報を発信し、現在全滅に瀕している日本の海岸線を生き返らせゴミを除去して、美しい日本の景観をよみがえらせたいものである。

日本の海岸線、景観を蘇らせたい

自然に戻るのではないビニールやポリ類が海岸線を汚している。護岸はコンクリートで固められ、テトラポットで埋め尽くされ、砂浜の続く純自然海岸は日に日に減少を続けている。海岸に自生する植物も減少し、今や絶滅寸前の状況である。幸いなことに小豆島では、未だところどころにスポッ的に海岸植生が残っており最後のチャンス。これらの植物を保護保全し、戸形小学校の校庭を実験フィールドにして海岸ビオトープを再生しようとするプロジェクト

まづは一番大切な基盤の整備として植物が生育する土壌を作ることである。校庭は永い間に渡り、子供たちに踏まれた土地で固くなっており、これをすべて掘りおこし、土壌改良剤を入れて、土地を改良し、保水性、排水性が良く、肥沃で多くの有益な土壌微生物が住む土によみがえらせることである。そして、そこに使用される植物としては小豆島の海岸線に見られるこの土地にあったものである。ハマエンドウ・ハマヒルガオ・ハマダイコン・ハマボウフ

物は「磯焼け」という現象で絶滅に瀕しており、これらの生態系も保全したいものである。

開発によって益々失われつつある動植物の生息空間を保全、復元再生するビオトープづくりは、これからの日本を担う、青少年の環境教育の一環としても素晴らしい活動であることには間違いないと確信する。

望月 昭「もちづきあきら」
ランドスケープ・アーキテクト、元兵庫県淡路景観園芸学校教授

平成20年5月26日、香川県にて「アート・ビオトープ」が設立認証される。

この法人は、小豆島土庄地区住民、旧戸形小学校卒業生をはじめ、来島者等、幅広い人々を対象としま

す。旧戸形小学校が培ってきた「学び」の歴史を活かし、「芸術」「文化」「スポーツ」などの体験機会を通じて

て、人材の育成に貢献する。この活動によって、旧戸形小学校「アート・ビオトープ小豆島」を訪れ関わるすべての人々に小豆島の「自然環境」と「学びの場」に誇りを感じてもらい、より一層の地域活性化に寄与していくことを目的とします。

ユートピアとしての南

―リゾートと、文化の場の起源を訪ねて(一)―

その昔、好きで愛読していたフランス文学者、岡谷公二さんの著作に、たしか、タヒチに渡って晩年を過ごした、後期印象派屈指の画家、ポール・ゴーギャンを語りながらの、「文明の自己否定性」という言葉があった。いたく感心したことがある。岡谷さんは、窮屈で抑圧的になりつつあった、一九世紀以来の、近代的な都心に対比しながら、その正反対のユートピアというか、豊かな感覚を醸成する場、自然のなかでの人間性の解放の可能性として、瀬戸の島島や沖繩のことを、いつも、熱く語られていたので、共感を覚えながら、よく読んだ。そういう時、人間の赤裸々な情熱は、つねに、南に向かうのだろうか。

たしか記憶によれば、「血が激む」、「その永遠に続くような停滞」に耐えられずに、旅に出るのだと、自らを開け放って、語っておられた。そういう、逃避者というか、都市に集中する、ウィウィッドではあるが、コントロールされた情報と、集中的な文化のインパクトに背を向けて戸惑う人人に、利便性や効率性に押しつぶされそうになって行き惑う人人に、自らを重ねながら、否応なくひきつけられておられたわけだろう。日本の戦前に、たしかにあった、国家的な意味での、南方幻想を別にしても、南洋庁の官吏として赴任した、「李陵」、「山月記」などの中国古譚で有名な中島敦も、『宝島』の作者ステイヴンソンの美しい伝記、「光と風と夢」を残した。

考えてみれば、中島敦も、現実逃避者と言うべきか、戦前の日本に

現在、さかんに話題になっている、さまざまな問題意識、自然回帰、エコロジー、環境保護、身体性の回復、アートや文化による場の活性化などの多くは、そのルーツを、遠く一九世紀末に、見つけ出すことができる。ヨーロッパ各地で、都市の喧騒と圧迫を逃れて、画家や建築家、場合によってはダンサーたちが、郊外の森に集って共同生活した、芸術家村、アーティスト・コロニーが、それにあたる。ヨーロッパは、日本に較べて、はるかに都市の歴史、その地層の厚みが大きく、公園や広場に集う、ゆったりとした時間を楽しむ人人を多く見かける。それでも、世紀末当時、芸術家たちは、効率や利便性を追求する都市の息苦しさ能耐えられないで、脱出したのである。

この状況を考えるとき、現在の日本では、頭を抱え込んでしまうのは、私だけだろうか。

新見 隆「いにみりゅう」
武蔵野美術大学芸術文化学教授
ギャラリー冊、アート・ビオトープ那須 顧問・キュレーター

初夏の花 山法師

初夏万緑、尾根に腰を下ろすとポツン、あるいはポツン又ポツンと樹冠一面に雪を乗せたような白い花が目飛び込んできます。ヤマボウシである。ヤマボウシは、ほぼ5年に一度、全山一斉開花をする面白い木です。有り余る程の果実を結ぶ開花は、種を散布する動物たちに、種まで砕く上位の動物が果実を食べ残してくれる自然の仕組みであろうか。

ヤマボウシは、実はハナミズキと近縁で両者の花の構造は同じである。二・三十の花が金平糖のように中央に集まり、その周りを花弁のような四枚の苞を取り囲んで全体で一輪の花のように見えます。ハナミズキは公園や街路樹によく似合いますが、四枚の苞が江戸の植木屋に嫌われたヤマボウシは、庭師を入れない自然風の庭にもっと取り入れられてよい我が国の優れた落葉樹である。

小豆島でヤマボウシが集められている所があるのでご紹介しましょう。そこは段山といって少し不便な所です。その山の上には、終戦直後、開拓集落があつて委託で野菜の種採り栽培が行われていました。戦後を忘れることはありませんが、その開墾畑の後地が今では別荘地になっていて入り口附近にヤマボウシが配されています。うま〜一斉開花に巡り合えば、清楚なヤマボウシが集まり咲く景観に心打たれることでしょう。

八代田 素樹 [やしろだもとき]
小豆島・瀨崎在住

ファンタジー作家
池田あきこ先生の原画。

小豆島に展示決まる！



池田 あきこ プロフィール

本名 池田晶子。東京、吉祥寺生まれ。1987年より、架空世界である「わちふいーんど」と猫のダヤンの物語を描き始める。「わちふいーんど」シリーズを中心に「YOYO」シリーズや、旅をイラストでつづった「スケッチ紀行」シリーズ、作品タイトルは85冊、総発売数で150万部を超える。その他、教科書の挿絵なども手がける。

公開される構成でマニアの間で話題となった。

今回の展示ではアニメに使われたセル画ではなく、原画が中心となる。小豆島に展示が決まった理由として「小豆島はヨヨーとココの世界観である地中海に浮かぶ島のイメージにぴったり。せっかくの作品を展示する場所がなかったのが残念だったけど小豆島という素敵な場所が見つかったとても嬉しい。」とは池田先生の談。山梨県河口湖にある木ノ花美術館とはまったく異なる作品が収蔵されることから、ファンにも今まで直接見ることができなかったお宝の展示に期待が高まっているという。

さらには作品の中心となる「海猫亭」というバーでおいしい料理をふるまうマスターのヨヨーと娘のココの雰囲気も味わってもらえる様、移動式カフェ「海猫亭」が旧戸形小学校の校庭に設置される。太陽にあふれた海を眺めながらおいしいデザートや飲み物を楽しめ、陽気な気分であートを楽しめる施設となりそうだ。

地霊からエナジーをいただいて

— イサム・ノグチ庭園美術館

高松の東、豪州の「エア・ロックス」と見まがう山頂の平らな屋島。その東側「屋島古戦場」入り江。そして、五剣山。四国八十八カ所霊場「84番屋島寺、85番八栗寺」にはさまれたのどかな所、庵治石の産地、石工衆の町「牟礼」。この石鎚の音が響く一角に「イサム・ノグチ庭園美術館」がある。

日系2世の芸術家イサム・ノグチは、1904年にロサンゼルスで生まれ、幼少時は日本で過ごしま



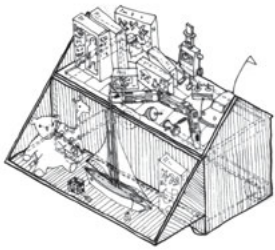
した。渡米後、欧米を巡りながら創作活動을続け1969年から20年に渡り、この地で石匠・和泉正敏氏とともに制作しました。ここは「生前の状態で出来るだけ残し、後世の人々にインスピレーションの源泉」として伝えたい」というイサムの遺志により、建物だけでなく周りの環境を含めた全体が作品であり、美術館であることを感じさせる。ショップのある受付から、美術館スタッフの案内で巡っていくと作業蔵があり、主をなくした道具。展示蔵には大小の作品が並ぶ。屋外展示された空間を、石垣が包みこむように囲んでいる。イサムが長年培った創造の場は、鑑賞者に無言の力を感じさせる。

彫刻庭園に登り全体を一望すると、屋島の水平ラインと樹木の丸みが生み出す調和が美しい。イサムも此処で多くの時間を過ごしたのであるうか。

私も斜面の芝に腰掛け、夕焼けに浮き出る屋島の稜線に思いをはせた...

マーケットに個性を！

建築だけでなくアート展でも活躍中のアトリエ・ワンがデザインした可動式ワゴンが、那須のマーケットでデビューします。世界の市場を研究している彼らの、オブジェとしても美しいワゴンです。さらに来春には、小豆島にもお目見えします。



アート・ビオトープ小豆島で働きませんか

マーケット出店者募集

- 地産のお野菜(現場調理歓迎)
- 海鮮(干物、加工品)
- 食品(加工品)
- 青果
- 生花
- 植栽 その他

スタッフ募集

- ショップスタッフ
- 経験者歓迎
- アート・ビオトープスタッフ
- 工房、A・Rの施設運営、企画、広報、制作
- 学芸員資格者歓迎

問い合わせ先

03-6826-3550
アート・ビオトープ小豆島
東京準備事務局

美しい島、
癒しの楽園

小豆島国際ホテル
予約専用フリーダイヤル
☎0120-087962
☎0879-62-2111 (代表)

“自然の恵み”
オリーブのスキンケア



小豆島ヘルシーランド(株)
☎0120-77-0000
http://www.healthylive.com/

文化の恵みを祝す収穫祭――

「アート・フェスタ那須2008」開催！

東京から東北新幹線で75分。御用邸を有し、古くからリゾート地として愛されてきた那須高原。今夏スタートする「アート・フェスタ那須 2008」は、温泉、ゴルフに代わる新しい観光コンテンツとして、さらに、地域振興運動となることに大きな期待が寄せられています。

「山のシュレ」。那須山麓横沢地区にあるアート・ビオトープ那須で開催される3日間のオープンカレッジ。各界で活躍されている方々を講師として招き「芸術、日本、地域学レクチャー」から「モノ作り、自然体験ワークショップ」まで、日常生活をより豊かに過ごしていただくためのプログラムが盛りだくさん。さらに音楽と共に過ごす「夜の会」では講師、受講者の交流を通して、気づきによる新たな発見へとつながって下さい。老若男女問わず幅広く、多くの方々にご参加いただきたく、事務局スタッフ一同お待ちしています。

【講師（五十音順敬称略）】
伊地知裕子（アートディレクター、MUSE COMPANY 代表）、伊藤俊治（美術史家、東京藝術大学教授）、伊東豊雄（建築家、井上ひさし（小説家、劇作家）、奥野憲一（東京国際ガラス学院副院長）、川崎景介（花文化研究家、マミフラワー・デザイン・スクール校長）、桐島洋子（作家）、熊倉純子（東京藝術大学准教授）、篠原準八（山野草料理研究家）、高橋禎彦（ガラス作家）、竹村真一（文化人類学者、京都造形芸術大学教授）、塚田晴可（ギャラリ

無境主人）、てんつくマン（路上人、元・軌保博光）、遠山公一（慶應義塾大学教授）、中村錦平（陶芸作家）、中村洋子（陶芸作家）、新見隆（武蔵野美術大学教授）、馬場浩史（スターネット・カフェ）「馬場浩史環境設計事務所主宰」、平かおり（チェンバロ奏者）、原莊介（ギタリスト）、原宏隆（シニア・ワイン・アドバイザー）、アカデミー・デュ・ヴァン）、半屋弘蔵（からくり人形師）、樋口健彦（陶芸作家）、藤原誠太（養蜂家）、宮崎康典（二期倶楽部総料理長）、安田登（能楽師）、山本三千子（室礼研究家）、吉田加南子（詩人）、李禹煥（美術家）、李鳳宇（映画プロデューサー）、ワサブロー（シャノン歌手）

「オランダ・アウトサイダー・アート展」は、20世紀初頭にヨーロッパの精神科医たちによって発見され、その後、アール・ブリュット（Jean Dubuffet 1901-85）としても賞賛し高まりをみせた芸術です。オランダの施設「ヘーレン・プラッツ」など、正規の美術教育を受けていないアーティストによる絵画約80点が展示されます。

稀代のクリエイターが、二期倶楽部のゲストルームを「自分好み」の



室礼にリ・デザインする「二期倶楽部 Hotel in Hotel 'Konomi'」。世界にたったひとつの部屋として提案し、一般公開後、事前予約で宿泊できるようです。お楽しみに！

【参加クリエイター】
甘露寺芳子（スタイリスト）
ヒロコ・コシノ
（ファッション・デザイナー）
須藤玲子
（テキスタイル・デザイナー）
塚田晴可（ギャラリ無境主人）
松浦弥太郎
（文筆家、「暮らしの手帖」編集長）
皆川明
（ファッション・デザイナー）

このほか、「アート・フェスタ那須 2008」（8/28〜11/16）期間中、「ギャラリ」では、工芸作家による展示販売。二期倶楽部主催「秋の音楽会〜ワサブロー シャノンを謳う」。アトリエワン制作による展示台を活用した、出展者による臨時市場では、地元産野菜や果実他特産品を紹介します。
（詳細は4P参照）

土のやわらかさを感じる ――中村卓夫のかたち

人と自然から刺激を受ける、参加型陶芸ワークショップ開催
4回目の特別ワークショップが、5月17、18日の2日間、開催された。講師は、金沢在住の中村卓夫氏。



【①】

スライドレクチャーでみる
作風と思想

中村氏の、伝統や空間に対する考え方を、作品のスライドを見ながら解説していただいた。

一つ目の特徴である「空間観」は、すべての作品に共通する重要なポイント。例えば代表作「器になることをやめようつわ」【①】を見てみると、題名のごとく、器がオブジェかを考えさせられる。氏は、建築と作品とが生み出す空間の面白さにまで、作品の存在が及んでいくことを期待している。そして、もうひとつの特徴が、鮮やかな模様。伝統的な九谷の和絵具でありながら、その一風変わったデザインと、梅山窯独自の象嵌色絵技法とで、新鮮な作品を作り出している。

琳派に学んで制作に取りくむ

江戸時代に活躍した琳派は、大胆な構図を、型紙をもちい同じパターンを繰り返し描く技法を特色とした。中村氏は、日本を感じる琳派の模様に魅力を感じており、何枚もの図版をストックしていた。「作品の上に、角度を変えながら模様を合わせていき、配置を決めると鉛筆で線を写していく。更に、紙を裏返してカイロ灰で鉛筆の線をなぞり、なぞった面を作品に押さえつけて線を写し取る。」と講義され、賑やかなムードの中、午前のレクチャーが終了。

卓夫流デザインと、
九谷の上絵付けに挑戦！

ワークショップ「デザインから上絵まで」が始まった。カイロ灰の線を、能登良須（二酸化マンガン）でなぞり、骨描きと呼ばれる輪郭を描きおこした。和絵具は、「描く」よりも「乗せる」ようにするのがポイントだ。

色鮮やかな作品に 感動の声

天候に恵まれた二日目。公開制作の後、待望の窯出し。受講生からは「きれい」「鮮やか！」と感嘆の声があがった。次は「金箔貼り」。まず、フラックスやテレビペンといった材料を混ぜて作った油を、金箔を貼りたい部分に筆で塗っていく。金箔を移したら、油を塗った部分にこの箔を貼り付ける。金箔を真綿でやさしくたたき、定着させていった。きらきらに眩しい作品に仕上げ、全行程が終了。参加者からは、満足げな表情で「楽しかった」「充実した二日間でした！」「こんなにステキな作品が作れるとは思っていなかった」など、うれしい感想と笑顔をいただいた。自然と感性の交わり

創作に夢中になりながらも、のんびりと散策して、自然を満喫する時間。二日間にわたる滞在型ワークショップは、天候にも恵まれて大盛況のうちに幕を閉じた。

公開制作レポート



一瞬で現れる、
タタラづくりの美しさ――
目の前で披露される妙技を見る

一日の午前、中村卓夫氏の公開制作が行われた。タタラづくり（板づくりとも言う）の技法を得意とする氏。一本の切り糸で、土の塊から作品を生み出していく様子は圧巻。みるみるうちに土の形が変わっていき、受講生からは驚きの声があがった。土の、生まれたてのやわらかさを大切にした作品から、作家のやさしい人柄が伝わる。

アーティスト・イン・レジデンス考

—Yokoko Art Community—

前編

小さなアートの複合施設から大きな可能性を！

I. アーティスト・イン・レジデンスのこころ

アーティスト・イン・レジデンスとは何か不思議な響きを持った言葉であると思う。十年以上も前に日本にもたらされた用語でありながら、未だにカタカナのままに使われている。アートに係わる用語は、国内ではカタカナのままがふさわしいとこの筋の専門家は考えているのだろうか。様々なルーツから入ってきた言葉は元との関連付けが大事なのかもしれない。中国語では「藝術家進駐」となっている。

アーティスト・イン・レジデンスと名乗るものの中には、シンポジウム、アート・フェスティバル、展覧会等のプログラムも混在していることもあるが、アーティスト・イン・レジデンスの基本は、三つの空間、すなわち創作（スタジオ）、滞在（レジデンス）そして展示（ギャラリーなど）、そしてプログラムとしては、滞在制作、ワークショップ、展示、交流などの活動が含まれており、滞在期間も一ヶ月程度の短期間から、一年以上のものや千差万別だ。プログラムへの参加人数と構成も多様で、活動分野も、音楽・舞踏・演劇・映画、舞台美術・絵画・陶芸・彫刻、

写真・文芸等・文学・哲学など広範囲だ。

アーティスト・イン・レジデンスの歴史についても諸説があり、1900・Yaddo(NY)が元祖だとか、古典的博品陳列館から始まった美術館発展段階の一つとして、アーティスト・イン・レジデンスが美術館の代わりに位置付けられるという話もあるようだ。遣唐使・遣隋使もその例であるかもしれない、そして日本古来から「旅先づくり」なる創作旅行が数多くあったということでも新しい概念ではないのかも知れない。運営主体も、公共団体の運営するものから、非営利団体（美術館・財団）、民間企業、さらに、個人が運営するものがある。

アーティスト・イン・レジデンスは誰が利用するものなのか？一義的にはアーティストだ。そこで利用するアーティストとは？という観点について若干考察しておきたい。アーティストに関する興味深い考えを紹介する。二種類のアーティストの存在、一つは、クリエイトする（つくる）アーティスト Creative Artist、美術作家、作曲家、詩人、舞台美術家、振付家、個人の映像作家など、無からモノをつくっている創造を仕事と



おしゃれなタンブラー

ガラススタジオにて
廃瓶を材料とした
オリジナル・グラスウエアの販売
(受注生産)を開始いたします。
第一弾の作品は、
ミネラルウォーターを
利用したタンブラーです。
アート・ビオトープ那須
オリジナルタンブラー
¥1,260



する者（製造業）。もう一方は、解系のアーティスト Interpretative Artist：戯曲家の作品を演ずる「役者」、振付家の作品を踊る「ダンサー」、作曲家の作品を弾く「演奏家」など。クリエイトする（つくる）アーティストがつくったものを実践する者（解系業）。

今、社会の中で生きて行くのが一番困難なジャンルは、解系のアーティストよりもクリエイティブ系の方だそう。

そして、そのアーティストには六つの段階があるとの定義。

1. 生活にもチャンスにも飢えているアーティスト
 2. 芸術家稼業以外の職で生活費を稼いでいるアーティスト
 3. 芸術家稼業だけで食べていけるアーティスト
 4. 頭角を現し始めたアーティスト
 5. 名のよく知られたアーティスト
 6. (過去の巨匠ではなく) 今の時代に生きて作品をつくり続けている現存のアーティスト
- 塩谷陽子(ニューヨーク芸術家共済の街二九八八より)
アーティスト・イン・レジデンスはアーティストの成長の起爆剤となると確信する。

村田達彦「むらたたつひこ」
遊工房アートスペース共同代表 Res Artis 理事
www.yokoko.co.jp

「山のシュレ」

8/28(木)~31(日)

「レクチャー」講座90分 各4,000円

伊東豊雄(建築家)/井上ひさし(小説家、劇作家)/桐島洋子(作家)
塚田晴可(『ギャラリー無境』主人)/てんつくマン(路上人、元・軌保博光)
新見隆(武蔵野美術大学教授)
馬場浩史(『スターネット・カフェ』[馬場浩史環境設計事務所]主宰)
李 禹煥(美術家)/李鳳宇(映画プロデューサー)

伊地知裕子(アートディレクター、「MUSE COMPANY」代表)
伊藤俊治(美術史家、東京藝術大学教授)/伊東豊雄(建築家)
川崎景介(花文化研究家、マミフラワーデザイン・スクール校長)
遠山公一(慶應義塾大学教授)/原宏隆(ソムリエ、「アカデミー・デュ・ヴァン」)
吉田加南子(詩人)

熊倉純子(東京藝術大学准教授)/竹村真一(文化人類学者、京都造形芸術大学教授)
新見隆(武蔵野美術大学教授)/原宏隆(ソムリエ、「アカデミー・デュ・ヴァン」)
安田登(能楽師)

「ワークショップ」

10:30~ 10,000円(1日) *3日間の連続受講をおすすめします。
「暮らしのかたち-土に親しむ三日間」
中村錦平・中村洋子・樋口健彦(陶芸作家)

13:00~ 4,000円(吹ガラス1体験) *1日限定8組要予約
「炬をつくるから始まる二日間-ガラスの魅惑」高橋禎彦(ガラス作家)

11:00~ 8,000円(教材費込)
「室礼-日本の風土と美の風習」山本三千子(室礼研究家)
13:00~ 無料
「からくりおたのしみ」半屋弘蔵(からくり人形師)
14:00~ 6,000円
「蜂と人と自然の新しい関係」藤原誠太(養蜂家)

11:00~ 6,000円
「ベルエポック・古き良き時代の仏蘭西料理」宮崎康典(二期倶楽部総料理長)
14:00~ 6,000円
「バロック音楽とチェンバロに親しむ」平かおり(チェンバロ奏者)
11:00~ 6,000円 *子供参加(5歳以上保護者同伴)は半額にて承ります。
「摘み草ウオークを楽しむ」篠原準八(山野草研究家)

「夜の会-夕食ビュッフェとワン・ドリンクの交歓会」19:00~ 各6,000円

吉田加南子(詩人)+ワサブロー(シャンソン歌手)
原杜介(ギター奏者)
平かおり(チェンバロ奏者)

0287(78)7833 山のシュレ事務局

e-mail:schule@nikiresort.jp

お申し込みFAX 0287(78)6627 アート・ビオトープ那須

発行：NPO法人アート・ビオトープ／編集：富田勝彦／協力：安藤麻衣子、片山亜香梨、木本禎一、種田真麻里、郷右近丸彦／執筆：新見隆、村田達彦、望月昭、八代田素樹／

印刷・DTP：エデュプレス ※本紙記事の無断転載を固く禁じます。

アート・フェスタ那須2008イベント



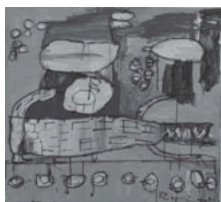
特別企画「オランダ・アウトサイダー・アート展」

8/29(金)~11/16(日)

にき倶楽部1986[二期ホール]で展示。

会期中展示替えがあります。

03(5410)5135 オランダ・アウトサイダー・アート展



マーケット

8/29(金)・30(土)・31(日), 11/15(土)・16(日)

アート・ビオトープ那須周辺

03(5410)5135 アート・フェスタ那須2008事務局

二期倶楽部 Hotel in Hotel “Konomi”

11/15(土)・16(日)一般公開展覧 11/17(月)~12/25(木)予約宿泊

03(5410)5135 アート・フェスタ那須2008事務局

*宿泊お申し込み 0287(78)2215 二期倶楽部予約係

アート・ギャラリー

11/15(土)・16(日)

にき倶楽部1986内、観季館



秋の音楽会—ワサブロー シャンソンを謳う—

11/16(日)18:00~

にき倶楽部1986内、観季館 15,000円

ワサブロー：京都出身、パリ在住30有余年。和製シャンソンの域を超えた国際的アーティスト。